

北海道アイヌ口承文芸にみる 黒ギツネ神と神の印象色

安田 千夏

1. はじめに

2017年秋、北海道斜里郡斜里町でキタキツネの黒化個体が確認されたという報道があった。黒（白）化個体は一定の割合で自然界に出生するが、本例が示す通りキタキツネは人里近くに現れることがあり、野生生物の中でも非常に人目につきやすいという特徴がある。そしてこの時にアイヌ口承文芸に登場する黒ギツネ神、またそれに関連して白ギツネ神が注目されることとなったのであるが、これらの神については未検討の課題が多々あるということを再確認した。そこで本稿では、この二神の問題について考えてみることにした。

キツネの伝承について周辺文化に目を向けてみると、日本のキツネ伝承は、中国の妖狐伝承の影響が認められる。こうした伝承では往々にしてキツネは年を経るごとに妖力を増していくとされている。そして、これも中国の文献にある「白い生物は瑞獣で、献上された際に年号を変える」という故事からの影響で、日本でも白鹿、白蛇、白ギツネなどの白化個体を神の使いとする信仰が各地にあり、それに伴う伝承も数多く見受けられる。またこれ以外にも、由来には諸説あるものの日本で発展した稲荷信仰によって、キツネ神を祭神とする社が各地に存在し、キツネが信仰の対象となる一方で、人に「取り憑く」「ばかす」という民間伝承も数多く見受けられる。日本文化のキツネは神である一方で妖怪と見なされる例も数多く、神と妖怪は近いものであるにせよ、その伝承数が膨大で、性格を一元的に語るのには難しい⁽¹⁾。

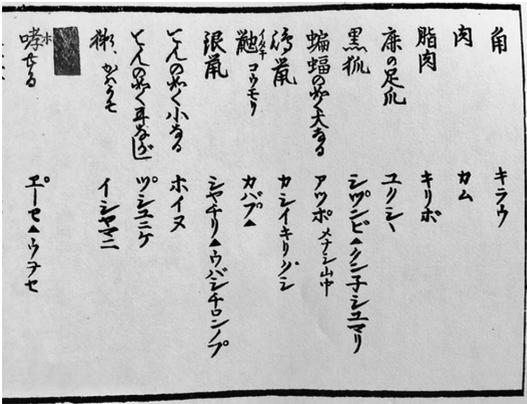
本稿では、アイヌ文化のキツネは妖怪ではなく、他の生物神と同様に神であるということまずは明らかにしたい。人をばかすというタイプの伝承が皆無というわけではないが、悪事を働く場合もそれは妖怪化しているのではなく、善悪の二面性があるアイヌの神々の特徴と読み取りたい。そして後半では国立アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ⁽²⁾で公開されている口承文芸資料を用いて「アイヌ文化の神の色」の問題を検討していくことにする。

2. アイヌ文化の黒ギツネ神について

2-1. キツネ神について

まずアイヌ生活誌におけるキツネ神の性格を見ておきたい。これはキツネ神に限らずアイヌの生物神の特徴であるが、普段と違う鳴き方や行動などを通じて、人間に変事を知らせるという考え方がある。その中でキツネ神も津波などの災害を事前に察知して知らせてくれたために助かったという話がいくつか採録されている。またキタキツネ、オコジョ、エゾクロテン、ウミガメ類などの生物の頭骨を保管しておき、それを使用した雨乞いや狐運に関する呪術行為なども行われる。

2-2. 実在を想定させる資料



(図1 上原 1804)



(図2 北海道出版企画センター 1997)

江戸時代の資料に「黒狐」と書かれた資料がある(図1、2)。そこに併記されている名称は、いずれもアイヌ語で黒ギツネを意味する *situmpe* と解釈できる⁽³⁾。興味深いのは、いずれも実在する生物に並べて記載されている点であり、2017年に確認された黒化個体のような存在が江戸時代にも確認されていた可能性がある。しかしこの記録は和人の手によるものであり、アイヌ文化における黒ギツネ神についての考え方を記録したものではなかった。

明治以降には、アイヌの暮らしに接して見聞きしたことに基づいて書かれた資料が存在する。イギリス人宣教師のジョン・パチェラーは、アイヌ語で以下のように記録した。

Koroka, nei chironnup obitta anomi ambe shomo ne. Kunne chironnup iyotta pirikap ne wa akosiratkip wa gusu aye katu *Shitumbe Kamui* ari ayep ne. Nei itak ikkewe anak ne *Koshne kamui* sekora'an itak ne ruwe ne. *Shitumbe kamui* sapaha koshiratki utara

poron no okai ruwe ne.

しかし、どのキツネも全てが祭られるわけではありません。黒ギツネが一番良いもので秘密の守り神とされるために、呼ばれる名は「シトゥンベカムイ」というのです。この言葉の意味は「軽い神⁽⁴⁾」というのです。シトゥンベカムイの頭骨を秘密のお守りにする人たちはたくさんいるのです。〔パッチェラー 1924、筆者訳〕

ここには、キツネ神の中で黒ギツネ神が「一番よく」、またその頭骨を「秘密のお守り」にするという実在性につながる記述が見られる。

2-3. キツネ神の首領的位置づけ

パッチェラーの記録に現れている「キツネ全ての中で黒ギツネが一番良い」という考えは、アイヌ自身が記録、もしくは語り残した資料にも見られる。

§ 270 キタキツネ、きつね

(中略)

(6) *situmpe* シトゥンペ [< *situ* (山) *un* (にいる) *-pe* (もの)、'山にいるもの']

(北海道全地域、S 多蘭泊)

注. — この語はキツネに対する敬称である。キツネの中でも、アイヌにもっとも尊ばれるのは、クロキツネなので、この語を特にクロキツネの意味に用いることが多い。(中略) くるキツネを、ふつうには「クンネ・シトゥンペ」という。〔知里 1962〕

解説「稲荷大明神の話」

葛野さんの説明。「キツネは、普通チロンヌプ° (*chironnup*) と言うが、これはシトゥンピカムイ (*si-tu-un-pe-kamuy* 「大きな・走り根・にいる・もの = 黒キツネ・神」。葛野さんはこれを稲荷大明神と呼んでいる) の部下なんだ。キツネは、人間に災いがかかる前に予報してくれたり、何か変事があれば教えてくれる神なんだ。〔葛野 1983〕

2-4. 危険を知らせてくれる神

黒ギツネ神は、キツネ神がそのように考えられていることと同じく「危険な何かを知らせてくれる神」と考えられていることを示す資料もある。

善い前触れや悪い前触れを伝えてくれる鳥もいます。この鳥たちは、時を逃さず人々

に差し迫った災いの起きるのを知らせることを自分たちの務めとしています。普通には暗くなってからこの前触れが伝えられますが、それは黒いキツネが何かの前兆を知らせてくれる時刻と同じ頃になります。〔マンロー 2002〕

シノタイの黒狐の神

沙流川の河口の東にシノタイという小岬がある。(中略)ここに鎮座する神を Sinotay kunne situnpe 〈シイタイの黒狐の神〉と称している。(中略)この黒狐の神の由来について、次のような伝説がある。

『むかし、浜辺で漁をしていた人たちが、或る日、どうも空が曇っていたので沖に出るのを見あわしていた。すると夜中になって山の中に棲む狐が騒ぎ出した。それも普通の鳴き声ではないので、何かのお知らせであろうと思って戸外へ出てみると、沖の方が火の燃える様に真赤になっている。これは大変、オレブンペ orepunpe 〈津波〉に違いない。狐の神が知らせてくれたに違いないと思って、みんな山の方へ避難し始めた。ある人たちは狐の居るシノタイエトコの山へ、別の人たちは川向いの山へと、それぞれ二手に分れて逃げた。やがて思った通り津波がやって来た。ところが川向いの山へ逃げた人たちは、山が高いから大丈夫と思っていたが、津波を受けて、3回目の時は山の凹みに積み重なって死んでしまった。この凹みの場所を後にチホマッコツ chihoma kot 〈恐い凹地〉といわれた。

一方シノタイのエトコでは、津波がおし寄せると波はそこで二つに切れて山へ行き、引き波も二つに割れて、3回押寄せた。どの大波もこの丘を避けて、人々はみな無事に助かった。このことがあってから、人々はこの山に棲む黒狐 kunne situnpe を守護神として祀るようになった。』〔鍋沢 1966〕

新冠の黒狐

(前略)又或る時はこの黒狐が祭壇のところに来て「フオー フオー」と騒いでいるので、何か変わったことがあるにちがいないと思って、もしその悪いものが沖から来るものなら山に向って行ってくれ、山から来るものなら沖に向って行ってくれと頼むと、狐は山の方に向って行ったので、部落中に知らせて高台に避難すると、おそろしい津波がやって来た。それほど有難い神だから酒をあげるのだという。(新冠町去童梨本政次郎老伝)〔更科 1971〕

アイヌ語アーカイブでは、次に示す通り沙流地方の川上まつ子氏によってこの類話が公開されているが、そこではこれは黒ギツネ神ではなく、ただのキツネ神とされている。鍋沢氏の報告でも泣き騒いだのがただのキツネとされていることから、黒ギツネ神は普通

のキツネ神の延長線上にいる存在で、役割が似通っていることから、時に混同されることがあったという事実を示しているのだろう。

C0148KM_34620AP「大津波を予知して村を救ったキツネ神」

ある村の上手に神の住む美しい小山があり、村長がその山へ祈りつつ暮らしていました。ある時キツネがその山のでっぺんから鳴きながら下りて来て、村長の家の祭壇に来て鳴き、やがて山の方へ鳴きながら帰って行きました。村長は、神が何かを知らせに来たに違いないから、キツネが帰った方向へ逃げようということになり、村中の人たちが大勢で山へ登って逃げて行きました。途中で狩小屋を作り、神へ祈りを捧げて泊りました。村長の夢にキツネ神が人間の姿をして現れ、山津波と海津波が来るということを告げました。そしてその晩には神が言った通りに地鳴りのような音がして、地震のように地面が揺れました。やがて水は引いて行き、もとの陸地が姿を見せました。そこに1軒、2軒と家を建て、新しい村を作りました。それからはキツネ神や助けてくれた色々な神に祈りながら暮らしました。〔梗概筆者〕

2-5. 口承文芸にみる黒ギツネ神の二面性

黒ギツネは危険を知らせるなどをしてくれるありがたい神であるという反面、それとは全く反対に、人間に災いをもたらす罰せられるというタイプの口承文芸も採録されている。その一例を次にあげる。

神謡（旭川 川村ムイサシマツ）

黒狐の神の妹が私で、兄である黒狐の神と一緒に人間の村を守りながら針仕事をしていました。私は着物をたくさん作り、兄は猟をして不自由のない暮らしをしていました。ある日兄が猟をしているうちに、私が正装をして外に出て踊りをすると、大風が人間の村に吹きつけて木も家もひっくり返ってしまいました。私は驚いて家に入り泣いていると、帰ってきた兄が心配してわけを尋ねました。すると上座側の窓になみなみと酒が注がれた酒杯が現れ、その上にある捧酒箸が動きながらこう言いました。「黒狐の神よ、今日あなたの妹が大風を吹かせ、人間の村をめちゃくちゃにした。早く元に戻してください」兄は酒杯を受け取り、家にあった12個の行器に酒を注ぐといっぱいになりました。そして私を怒鳴りつけ、私の髪をつかんで太い柱に私を打ちつけました。それきり私はどうなったのかわからなくなり、気がついてみるとゴミ捨て場の血の沼に浮かんでいました。兄は私を地獄に落とすのでした。そこから長い時間が経ち、人間の国にやっと出てくると、私は一株のフキノトウになっていたのだと、黒狐の妹が身の上を物語りました。〔久保寺1977、梗概筆者〕

アイヌの神々は、ヒゲマ神、フクロウ神、雷神などの口承文芸を通観するとわかる通り、善悪の二面性がある。力の強い神であればあるほど、その強い神力を行使して人間を助ける場合と災厄をもたらしてしまう場合の双方がある。黒ギツネ神も例にもれず、力の強い神としての悪しき行動とその結果を、この資料からは読み取ることができる。

2-6. アイヌ語アーカイブ資料にみる黒ギツネ神

アイヌ語アーカイブでは、黒ギツネ神について再三にわたり語っているのは川上まつ子氏であり、織田ステノ氏は黒ギツネ神についての質問をされても「聞いたことがない」と答えている。上田トシ氏は調査において黒ギツネ神が話題にのぼることはなかった。織田氏と同地方出身の葛野氏の語りは先述の通りである。以上のことから、この神は「知る人ぞ知る」存在であったらしいことがわかる。とりあえずここでは川上まつ子氏が黒ギツネ神について説明した資料の一部を以下に引用する。

まあ見たこともないけども uwepeker に聞いているのが、kunnecironnup の uwepeker はたびたびあるよ。あるのが cironnup の pasekamuy (位の高い神) だって。pasekamuy って言えばキツネのうちが一番偉い神だろうと思うの。(中略) だから kunnecironnup は a=nomi したり a…pasekorpe (重んじるもの) だっていうことは聞いてるけど、あとのぎっぱものあと (=小者達) は pasekamuy でもない、それこそ kosnecironnup (位の低いキツネ) …kosne… (咳) [資料番号 34603]

kunnecironnup (黒いキツネ) は nomi (~を祭る) したっていうこと聞いたことあるんだけど、赤い cironnup っていうものは nomi したの聞いたことも…。[資料番号 34620]

要約すると、川上氏は「黒ギツネを見たことはないが、散文説話に登場するのを知っている。キツネの中で一番偉い神である。後の小者たち (=普通のキツネ、赤ギツネ) は祈ったりしない」ということになる。しかしすでに述べた通り、川上氏は「大津波を予知して村を救ったキツネ神」という、キツネが人々を救い祈られるという散文説話を語っているので、ここでのキツネ感とは矛盾しているようにも見える。これについては他にも同じ沙流地方で以下のような記録がある。

キツネは河童を焼いた灰から生まれた。良いキツネは黒ギツネ sitonpikamuy、悪いキツネは赤ギツネ sakkimunpe (沙流) [更科 1976]

普通のキツネを軽視する、もしくは悪いものとする考え方は、アイヌ文化の中にもともと存在していた可能性と、日本文化の「人を化かす、取り憑く」キツネ像が影響を与えた可能性の双方を筆者は考えている。日本文化由来のキツネ像は、少なくとも1980年代の伝承者間では日常会話の中で共有され、葛野氏の説明ですすでに見た通り、キツネ神を「稲荷（何某）」と呼ぶこともある。アイヌ口承文芸でも日本民話「さるかに合戦」「くらげ骨なし」「ぬかおにぎり」などの影響を受けたものが存在することはつとに知られているが⁵⁾、さらにアイヌ語アーカイブ資料で日高地方のデータを精査すると「オシドリの番のかたわれを殺すと祟る」「河童がキュウリを好む」など日本文化由来の言い伝えをいくつか確認することができるので、こうした日本文化からもたらされた伝承という流れで捉えるのは無理なことではないだろうし、両文化に精通していた川上氏の中でキツネ神に対する評価が割れていたとしても不思議ではない。また氏の語りに散見する「古ギツネに化かされる」というタイプの話については、冒頭で述べたような、元来「キツネは年を経るごとに妖力を増していく」という中国から日本に伝えられた伝承の影響を考えていく必要があるのではないかと筆者は考えている。その理由は、アイヌの世界観では年をとっていることはむしろ尊敬の対象であり、老いが悪につながる例が明確に見出せない、それよりは見た目の貧相さのほうが問題にされている例が散見することによる。

2-7. 小括

アイヌ文化の黒ギツネ神については、近代以降口承文芸資料を含めた多くの資料が存在する。2017年に報道されたようなキタキツネの黒化個体がかつても存在したのであろうか、近世から1920年代にかけての資料には実在性が認められる。しかしそうした傾向はやがて失われていき、1980年代の調査資料では「黒ギツネ神を実際に見たことはなく、口承文芸に登場するのみである」という架空性が前面に出ている。また黒ギツネ神の資料は本稿に取り上げたものが全てではなく、「黒ギツネの神というのがいる」という程度の話、また口承文芸に「黒ギツネ神の妹」が登場するという例は数多く見受けられるということを付言しておく。

3. アイヌ文化の白ギツネ神について

3-1. 白ギツネ神の資料

白ギツネ神については、黒ギツネ神とは様相が異なっている。端的にいうと、その存在を示す資料が少ない。管見の限りでは次の3点が確認できたに過ぎなかった。

門別の白狐の神

門別の市街地の東方、門別稲荷神社の上手に白狐の神が鎮座していて、この神を守護神とする家系がある。門別川下流の Yuk-chise-kotan（幾千世村）の家系である。

この神の祭られる由来は明らかではないが、恐らく津波と関係があるものと考えられ、主として漁撈の際の守護の役目があるという。〔鍋沢 1966〕

遊楽部岳にレトラシトンビカムイエカシがいて、時化のときは舟を守ってくれる（八雲）〔更科 1977〕

白ギツネだけを送る。頭骨は *citarpe* に包んで神窓の左に安置し、家の守り神とする（旭川）〔北海道教育委員会 1982〕

黒ギツネに比べると資料数は多くなく、以上の記録からは津波や漁ろうに関する神であるというのがわずかに読み取れるのみである。本稿でこれまで見てきたように、アイヌの神々について詳しい記述のある文献〔バチェラー 1924・知里 1962〕の中にも、白ギツネについて触れられたものは見いだせなかった。

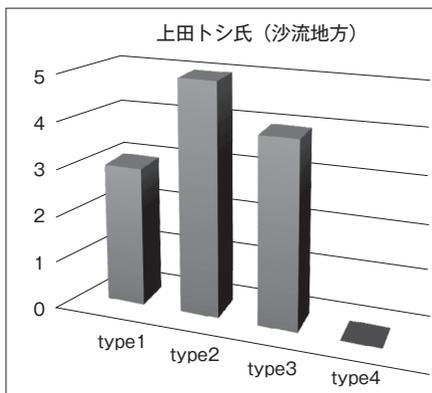
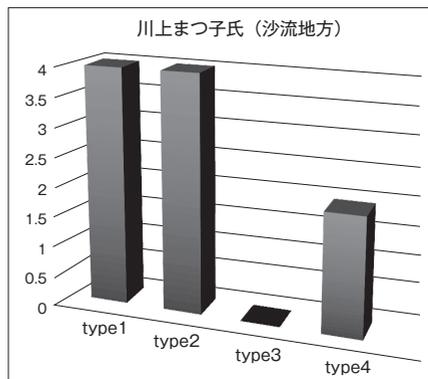
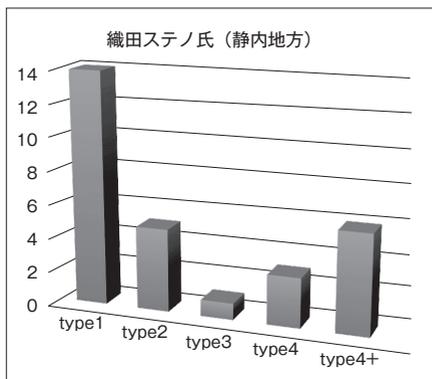
3- 2. *upascironnup* の訳語について

萱野氏の複数の文献資料には「白狐（ギツネ）」がタイトルになった散文説話が紹介されている〔萱野 1974、1977、1988〕。日本語でのみ紹介されている資料について追跡することは難しいが、アイヌ語の原文が確認できる「白狐と蜘蛛（の知恵くらべ）〔萱野 1988〕」では、該当箇所 *upascironnup* というアイヌ語名が確認できる。直訳すると「*upas*（雪）*cionnup*（ギツネ）」となるが、実はこれはギツネではなくイタチ科オコジョ（エゾイタチ）のアイヌ語名である。そうであるにも関わらず、そこに付されている訳語が「白狐」となっている。これは「昭和 38 年 4 月 27 日二風谷にて収録 貝沢こきんさん」とバックデータが示されている良好なテキストであるが、同じ話が同一著者によって繰り返し白狐（ギツネ）の話として紹介されている〔萱野 1974、萱野 1977〕。これらは誰もが手に入ることでできる良書であるがゆえに、採録数が多く見えてしまう一因となっているというのは見過ごせない事実である⁽⁶⁾。

こうした訳語の問題は既に指摘されており〔大谷 2015〕、白ギツネ（白狐）、雪ギツネ（雪狐）の訳語はどちらも *upascironnup* というアイヌ語名から派生したものと氏は整理している。筆者も「白ギツネ」にあたる *retarcironnup* というアイヌ語名が確認できる口承文芸の例を今のところ 1 例も確認できていないので、その見解に同意する。

4. アイヌ口承文芸にみる「黒い衣装の神」

本稿では、ここまで述べてきた諸問題について、新たな視点からの検討を試みることにした。既に筆者には、アイヌ語アーカイブにおいて、かつて1980～1990年代に採録された3名の日高地方の伝承者による散文説話（公開済）96編を対象に「神が人前に姿を現す時の姿を、話者がどのように表現しているか」についての分析を試みる機会があった〔安田2021〕。その概要は以下の通りである。



散文説話の主要なモチーフで、以下のようなものがある。神は神の国において人間と同じ姿をしているが、人間界を訪れる時に生物神であれば生物の姿、自然現象であれば自然現象の姿、つまり人間が普段目にしてきた姿に変身する。そして良きにつけ悪きにつけ人間と関わりを持った後に、再び人間の姿に戻って夢などの手段で人間と交信する。その時の表現について、4つのtypeに分類した。

type1. 抽象表現。「神なのでいかにも神らしい姿をした」という、いわば「神らしさ」を聞き手に委ねるスタイル。

type2. 色表現。「〇〇色の上等な着物（装飾品）を身につけた」というスタイル。

type3. 抽象+色表現または色+抽象表現。「神なのでいかにも神らしい姿をし、〇〇色の上等な着物（装飾品）を身につけた」というスタイル。「〇〇色の上等な着物（装飾品）を身につけ、神なのでいかにも神らしい姿をした」と順番が入れ替わることもある。

type4. その他（「ヘビ神であればヘビ模様」のような具象表現を含む）。

織田ステノ氏

資料番号	タイトル	採録年月日	登場神（日本語名）	色
C0016OS_34120A	女の腹に鮭が飛び込んだ話	1980年2月23日	不明	黒
C0043OS_34151AB	イヌエンジュの神に助けられた娘	1981年8月26日	赤マムシ	赤
C0044OS_34152AB	神の山の大カジカ	1981年9月13日	不明	黒
C0049OS_34158A	アイヌにタモギタケを授けた蛇神	1982年9月13日	短いマムシ	黒
C0062OS_34171AB_34172A	姉に殺され犬になった娘がオコジョ神に助けられる	1988年2月2日	不明	黒白
C0068OS_34180AB	イヌエンジュの神に助けられた娘	1988年2月8日	赤マムシ	赤

川上まつ子氏

資料番号	タイトル	採録年月日	登場神（日本語名）	色
C0150KM_34626AB	エゾマツと魔鳥	1985年11月20日	エゾマツ神の妻	黒
C0150KM_34626AB	エゾマツと魔鳥	1985年11月20日	魔鳥	黒
C0178KM_34720AB	ユベツの川尻の村の兄弟と沖の国の兄弟	1987年5月24日	不明	黒白
C0163KM_34695AB	イクレスイェとミズナラの神	1987年10月24日	ハリガネムシ神	赤

上田トシ氏

資料番号	タイトル	採録年月日	登場神（日本語名）	色
C0203UT_35228A	フクロウを養ったイクレスイェ	1995年10月26日	フクロウ神	黒
C0207UT_35231A	カツラの舟とハリギリの舟のけんか	1996年3月25日	カツラの神	黒
C0206UT_35230AB	白い犬の水くみ	1996年3月25日	オオカミ神	白
C0209UT_35232A	ウサギの穂摘み	1996年9月28日	ウサギ神	白
C0211UT_35234B	ヘビ神のツノ	1996年9月28日	ヘビ神	白
C0214UT_35236B	息子に「ゼンマイ」と名づけた夫婦の話	1997年8月27日	伝染病の神	白
C0233UT_35299B	石狩を守るクモ神の夢を見たパロアツテの話	1999年6月15日	クモ神	黒
C0227UT_35298AB	エゾマツと魔鳥	1999年9月29日	エゾマツの女神	黒
C0227UT_35298AB	エゾマツと魔鳥	1999年9月29日	魔鳥	黒

前稿での筆者の関心は、伝承者の年代や様々な事情によって、表現の差異は見られるだろうかという点にあり、それについては、時間あるいは伝承者の置かれた状況の変化に応じて、表現も変化していくということが確認できた⁽⁷⁾。

また前稿では詳しく触れなかった色表現について、改めてここで見ていくことにしたい。type2 と type3 「色表現」について、黒、白、赤の各色表現が見られるというのは、表で示した通りである。そして他の色に比して「黒い衣装」の割合が、どの話者においても最も多いという結果になった。そしてまたそれは「黒い衣装を身につけた（毛皮の黒い）クマ神」のように、生物本来の色にちなんでいるわけではなく、神名未詳を含めて様々な神が黒い衣装を身につけているという特徴があった。白に関しては、織田、川上両氏については単色で現れることはなく「黒い衣装を着た神、白い衣装を着た神」のように、黒との対

比の中でのみ現れていた⁽⁸⁾。白の単色表現は、上田氏のみに見られる傾向であった。同氏は、1980年代に多くの資料を語り残した織田、川上氏とは伝承者としての経歴に違いがある。両氏の没後、1990年代になってから多くの資料を語り残した方である。

以上のことから、筆者は以下のように考えている。アイヌ口承文芸で、もともと神に結びつきやすい色は黒であった。それは明治以降黒ギツネ神がキツネ神の中で最も位が高いと見なされてきた文献の記述と符合する。しかしすでに述べた通りに、1980年代には日本文化の伝承要素がアイヌの生活に浸透しつつあり、また情報の多様化に伴い、従来の色感覚からも徐々に乖離して白の割合が増えていくことになる。その大きな転換期が1990年代にあり、それが本稿で示したグラフに現れているということになるのではないだろうか。

もちろん変わりゆくことが宿命の口承文芸なので、これからも変わり続けていくことは疑いがない。しかし変わったという事実が語り残されたことには、大きな意味があったと考えている。

5. まとめ

アイヌ文化の黒ギツネ神は、おそらく実在した黒化個体に端を発し、アイヌ文化独特の色解釈によって「力の強い神」と見なされ、信仰の対象となりまた口承文芸のキャラクターとして成立していった存在である。それに対し白ギツネ神は、アイヌ文化の中に数少なく存在することは疑いないものの、口承文芸の訳語の問題もあり、本来よりもずっと数多くの採録例があるかのように見えてしまっているという結論に達した。

本稿ではアイヌ語アーカイブの資料を論拠にした部分が大きいが、それはアイヌ文化の様々な問題において不明、未検討な部分が多い中でも、自分なりの基準を持った上で各論を進めていきたいと考えたことによる。その基準とは、1980年代から1990年代にかけてのアイヌ生活誌そのものであり、口承文芸資料を含めた資料を詳細に分析した上で、その前後の時代や、日本文化やアイヌ文化の色認識という大きなテーマを考えていく手がかりにしたいというのが本稿のそもそもの発端であった。しかしだからこそ、あくまでも今回は限られた地域、ある年代の伝承者に関しての傾向であるという点を強調したい。1980年代の伝承者の語りにある種の普遍性を求めることは筆者の仮説の域を出るものではなく、今後の公開資料の増加や研究の進展のなかで、また違った様相が見えてくるということも大いにあり得る。

また本稿は、北海道の中でも日高地方を中心とした資料を扱ったものに過ぎない。そして口承文芸をテーマとしながら、英雄叙事詩については、生物神の性格が神謡や散文説話とあまりにも異なっていたため、筆者の力不足で言及することができなかった。

本稿をまとめるにあたり、大会研究発表後に本学会会員の方々に有意義なコメントの数々をいただいたことに、記して感謝を申し上げたい。

注

- (1) [直江 1984、坂井田 1996、国際日本文化研究センター 2002]
- (2) アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブは、2021年に国立アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブへ移転した。両者は同一のコンテンツであり、以下「アイヌ語アーカイブ」とする。
- (3) 黒ギツネを表すアイヌ語には (kunne)situmpe、kunnsumari、kunnecironnup などがある。
- (4) 「軽い神」というのは偉い神様であることと矛盾しているように見えるが、ここはギツネの別称「kema-kosne-kamuy (足が・軽い・神)」の kema が何らかの理由で落ちてしまったものと考えられる。
- (5) [久保寺 1977] など。
- (6) [稲田、小澤 1989] ではアイヌ口承文芸の白ギツネの話は5編採録されているが、そのうちの4編は萱野氏の著作に基づいている [萱野 1974、1977]。残りの1編 [浅井 1973] は、日本語のみの資料に「白狐の兄弟」が端役で登場する。兄弟の設定としては、「upascironnup uirwakikor wa sukup oruspe (雪狐の兄弟の話) [早稲田 1985]」があり、この類話と考えると、明確に白ギツネの話と確認できる例はひとつもないということになる。
- (7) 織田ステノ氏にのみ type4 + があるが、これは他の伝承者には見られない「山裾のクマおやじ」という特定のキャラクターを切り分けたことによる。ちなみに言及すると、この神は「やせて頭のはげかかった貧相な中年男」という姿で夢に現れてくる。
- (8) これについては今回の対象データに限られた偶然性も考慮しなければならない。例えば、織田ステノ氏の散文説話「犬の神様からの授かり物」では、オオカミ神の子孫である犬神が夢に登場する。織田氏は「白い犬はオオカミ神の末裔」という話をしているので、ここでも白い色の着物を着て現れるという予測が立つが、テキストでは type1 「神なのでいかにも神らしい…」という表現になっている。しかしそれらを考慮しても、白が黒を逆転するという現象は考えにくかった。

引用参考文献、データ

- アイヌ民族博物館『アイヌと自然デジタル図鑑 (web)』2015
アイヌ民族博物館『上田トシの民話 1～3』2015
アイヌ民族博物館『アイヌ語アーカイブ (web)』2017
浅井亨『日本の昔話2 アイヌの昔話』日本放送出版協会 1973
稲田浩二、小澤俊夫 (責任編集)『日本昔話通観I 北海道』同朋舎出版 1989
上原熊次郎『アイヌ語資料叢書 藻汐草』国書刊行会 1972 (1804)

- 大谷洋一「カムイの散文説話—白キツネ兄弟の物語—」『北海道立アイヌ民族文化研究センター第21号』2015
- 萱野茂『ウエベケ集大成 第1巻』アルドオ 1974
- 萱野茂『キツネのチャランケ』小峰書店 1974
- 萱野茂『炎の馬』すずさわ書店 1977
- 萱野茂『カムイユカラと昔話』小学館 1988
- 金田一京助『アイヌの神典』八州書房 1943
- 葛野辰次郎『神の語り・神互いに話し合う』オホーツク文化資料館 1983
- 久保寺逸彦『アイヌの昔話』三弥井書店 1972
- 久保寺逸彦『アイヌ叙事詩神謡・聖伝の研究』岩波書店 1977
- 国際日本文化研究センター『怪異・妖怪データベース (web)』2002
- 国立大学法人千葉大学『アイヌ語の保存・継承に必要なアーカイブ化に関する調査研究事業 第2年次(北海道沙流郡平取町)調査研究報告書』2015
- 坂井田ひとみ「日中狐文化の探索」『中京大学教養論叢 第36巻第4号』1996
- 更科源蔵『アイヌ伝説集』北書房 1971
- 更科源蔵『コタン生物記2 野獣・海獣・魚族篇』法政大学出版局 1976
- J.Batchelor『Ainu fireside stories』Kyobunkan 1924
- 知里真志保「アイヌの神謡2」『北方文化研究16』北海道大学北方文化研究室 1939
- 知里真志保『分類アイヌ語辞典 第2巻 動物編(遺稿)』日本常民文化研究所 1962
- 直江広治『民衆宗教史叢書 第3巻 稲荷信仰』雄山閣出版 1984
- 中川裕『アイヌの物語世界』平凡社 1997
- 鍋沢元蔵『アイヌの祈詞』門別町郷土史研究会 1966
- N.G. マンロー『アイヌの信仰とその儀式』国書刊行会 2002
- 北海道教育厅社会教育部文化課編『アイヌ民俗文化財調査報告書 昭和56年度アイヌ民俗調査I(旭川地方)』北海道教育委員会 1982
- 北海道教育厅社会教育部文化課編『アイヌ民俗文化財調査報告書 昭和57年度アイヌ民俗調査II(旭川地方)』北海道教育委員会 1983
- 松浦武四郎『蝦夷山海名産図会』(松浦武四郎選集二 北海道出版企画センター 1997)
- 安田千夏「アイヌ口承文芸(散文説話)にみる神の衣装表現について」『北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要6』2021
- 早稲田大学語学教育研究所『アイヌ語音声資料2 ワテケさんの昔話(沙流方言)』1985
(やすだ・ちか/国立アイヌ民族博物館)